



アビとはラテン語でミツバチのことです。ミツバチは現在世界中で使われているセイヨウミツバチの他にはアジアに9種が生息しているだけです。人間とのかかわりは古く、スペインのバレンシア付近の洞窟の「蜂蜜狩りの女性」の壁画は7千年以上ものだといわれています。

また、6千万年前のミツバチの化石がありますが、その後進化しておりません。ミツバチは社会性昆虫で、社会体制がしっかりと固まっているためと思われます。

女王蜂の寿命は3~5年、働き蜂は1ヶ月。女王蜂と働き蜂もメスで、まったく同じ受精卵から生まれます。分化は生育する巣部屋で幼虫期に与えられるえさの量と質によって決定されます。女王蜂に与えられるのは多量のローヤルゼリーです。そして羽化し空中30mのところで交尾、以後一日2千個以上の卵を生産産み続けます。毎日それと同じくらいの量のロイヤルゼリーを食べます。そんなことからローヤルゼリーにはすごいエネルギーの源があるのではないかと昔から思われていました。

働き蜂は羽化し先ず巣箱内の内勤バチとして巣箱の清掃、育児、番兵などをつとめ、その後もっぱら花を訪れ花蜜、花粉を巣に運搬して一生を終えます。偵察にでた働き蜂は豊富な蜜や花粉をもつ植物を発見すると、実物をくわえて巣に戻り、花の存在を8の字のダンスを舞って仲間知らせます。このハチの言語を発見したオーストリアの動物学者フリッシュは1973年ノーベル医学生理学賞を授与されました。

オスバチは無精卵から生まれ、種族維持が唯一の役目で、羽化後1週間もすると女王蜂と交尾のため晴天の日を選んで外に飛び立ちます。役目が終わると死んでしまうが、交尾できなかった個体もやがて巣箱から放り出され、野垂れ死にすることになります。

養蜂は古代エジプトではじめられ、ミイラにもハチミツが使われています。中世の修道院などでも照明として蜂蝋が使われ、そのために修道院内で養蜂が盛んにおこなわれました。

ミツバチは家畜であり、日本では農水省畜産局が管轄しています。わが国での近代的養蜂は120年前から行われるようになり、セイヨウミツバチとニホンミツバチが使われています。一箱の巣箱の中には働

き蜂が2~3万匹います。体重80mgのハチが一度に集めてくる蜂蜜は40mg。最盛期には3日で巣箱は満杯になります。

アピセラピーとはミツバチやその生産物(ハチミツ、ローヤルゼリー、プロポリス、ハチ花粉、ハチ毒)を用いた療法のことです。現代西洋医学が限界を感じさせるなか、代替医療の一つとして、可能性が注目されているのがアピセラピーです。アメリカの有名大学にはその講座があり、中国では関節炎やリウマチ治療のためハチ毒による治療を行っている病院もあるほどで、日本はその点で遅れているのが現状です。

2000年も前から効果が認められ、使用されてきたミツバチ生産物を積極的に取り入れて健康推進を図ることが今後ますます注目されていくものと思われます。

(厚木クラブ:2010年3月例会卓話)